

中 学 校

平 成 14 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

社	会
---	---

東 京 都 教 職 員 研 修 セ ン タ ー

平成14年度

教 育 研 究 員 名 簿 (社 会)

【地理的分野】

区市町村名	学 校 名	氏 名
豊 島	千登世橋中学校	芹澤 真裕理
練 馬	田 柄 中 学 校	平 松 秀 子
足 立	湊 江 中 学 校	宇 田 徹
狛 江	狛江第四中学校	敦澤 雅規
瑞 穂	瑞 穂 中 学 校	小 林 昌 浩

【歴史的分野】

区市町村名	学 校 名	氏 名
文 京	茗 台 中 学 校	吉 井 克 憲
江 東	深川第七中学校	斎 藤 行 弘
大 田	大森第七中学校	福 岡 哲 史
世 田 谷	弦 巻 中 学 校	◎安 齋 正 則
江 戸 川	葛西第三中学校	齊 藤 正 富
町 田	南成瀬中学校	○木 村 秀 夫

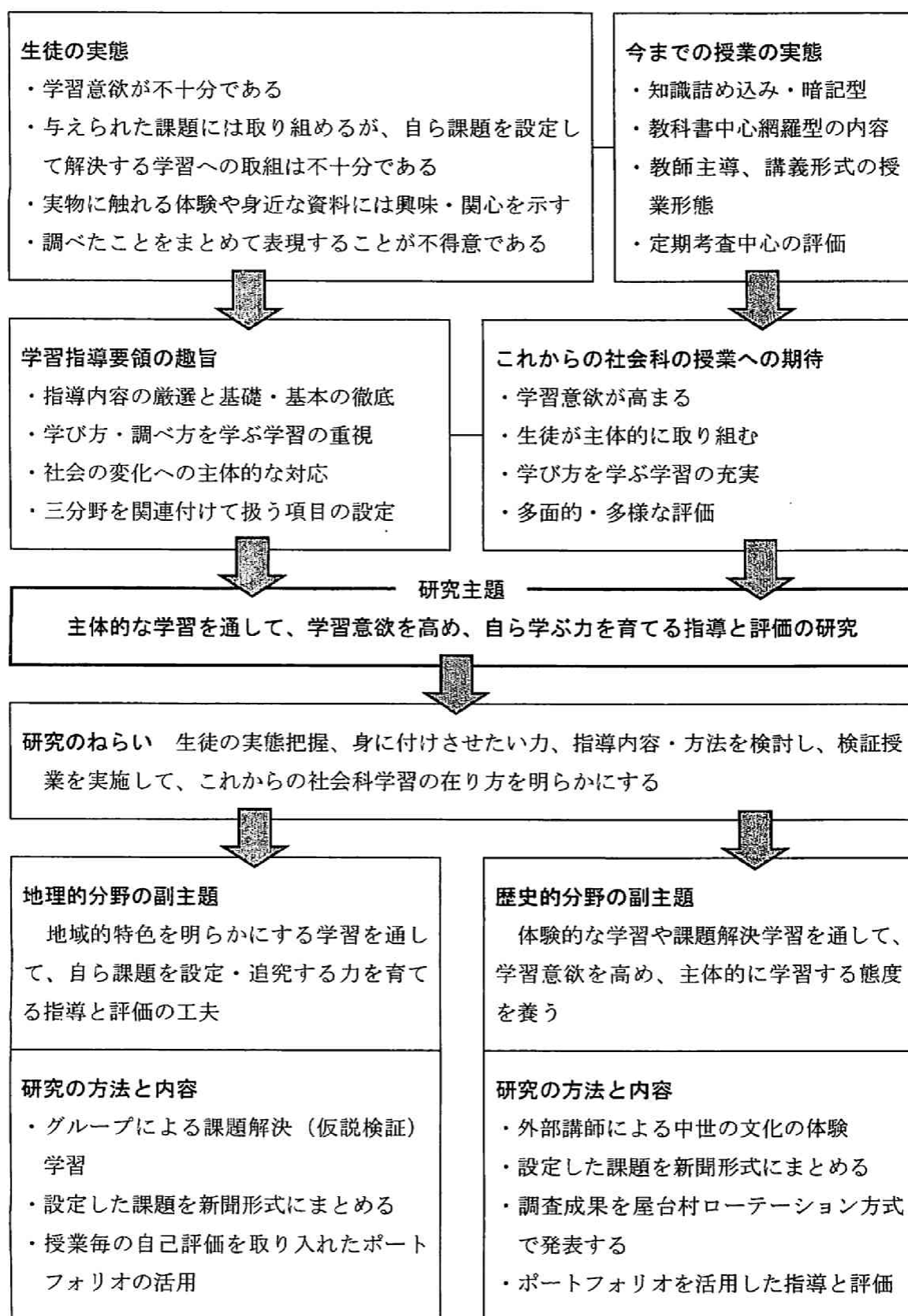
◎ 世話人 ○ 副世話人

担 当 東 京 都 教 職 員 研 修 セ ン タ ー 指 導 主 事 細 谷 美 明

目 次

I	全体の研究構想図	2
II	研究主題及び主題設定の理由	3
III	地理的分野の研究内容	4
1	地理的分野研究副主題及び副主題設定の理由	4
2	検証授業	5
(1)	単元名「都道府県」	5
(2)	単元設定の理由	5
(3)	「都道府県」の学習をどのように構成するか	5
(4)	事例とする都道府県をどのように選択するか	5
(5)	事例とする都道府県を選択理由	6
(6)	事例とする都道府県を扱う学習の視点と方法	6
(7)	単元の目標	8
(8)	学習指導計画	8
(9)	意欲を高め持続させるためのポートフォリオを活用した評価について	10
(10)	本時（第1段階）の目標	10
(11)	授業の考察	12
3	地理的分野の研究のまとめと今後の課題	13
(1)	研究のまとめ	13
(2)	今後の課題	14
IV	歴史的分野の研究内容	15
1	歴史的分野研究副主題及び副主題設定の理由	15
2	検証授業	15
(1)	単元名「東アジア世界と中世社会の変動」	15
(2)	単元設定の理由	15
(3)	単元の目標	16
(4)	学習指導計画	16
(5)	本時の目標	20
(6)	本時の展開	20
(7)	本時の評価	22
(8)	授業の考察	23
3	歴史的分野の研究のまとめと今後の課題	23
(1)	研究のまとめ	23
(2)	今後の課題	24

I 全体の研究構想図



Ⅱ 研究主題及び主題設定の理由

研究主題

主体的な学習を通して、学習意欲を高め、自ら学ぶ力を育てる指導と評価の研究

平成10年12月、学習指導要領の改訂が行われ、今年度から本格実施となった。中学校社会科の改訂に当たっての基本的な方針は、①内容の厳選、②学び方を学ぶ学習の充実、③社会の変化への対応、④3分野を関連付けて扱う項目の設定である。そして、社会科はその指導の在り方、評価の在り方を改善していくことが強く求められている。

評価については、教育課程審議会答申の「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」（平成12年12月）や文部省（当時）からの「指導要録改善の通知」（平成13年4月）でも方向性が示され、国立教育政策研究所教育課程研究センターや東京都教育委員会をはじめ各市区町村教育委員会等から、評価の在り方や方法論が試案とともに提示されている。ここにも評価の在り方を改善することで、指導の改善へつなげていく意図が読みとれる。

このように社会科だけに限ったわけではないものの、社会科の指導の在り方、評価の在り方の改善が強く求められているのは、この10年来の社会科の授業における指導と評価が旧来からのもの（知識詰め込み・暗記型の学習、教科書記述中心の網羅的な内容の指導、教師主導の講義形式の授業、ペーパーテストによる知識・理解中心の評価など）から脱却できないでいる学校の現状があるものと思われる。

このため、①学習意欲が不十分、②与えられた課題には取り組めるが自ら課題を設定して解決する学習への取組は不十分、③実物に触れる体験や身近な地域に関する資料あるいは具体的な事物・事象には興味・関心を示す、④調べたことをまとめて表現することが不得意、といった生徒の実態が生まれてくるのではないかと考えた。

そこで私たちは、これからの生徒の在るべき姿として、①学習意欲が高く、②主体的に学習に取り組み、③自ら学ぶ力を身に付ける姿を考えた。そのための学習形態として、課題解決型の学習を取り入れること、授業中の評価（形成的評価）やさらに生徒の学習記録や自己評価等を保存し学習の指導や評価に生かす方法（ポートフォリオを活用した評価）を取り入れることにより、学習意欲を高め、自ら課題を見出し、自ら学び自ら考え課題を解決しようとする生徒を育成することができるであろうと考え、この主題を設定した。そして、そのための最適な単元・教材、指導方法、評価場面及び評価方法についての検討をそれぞれの分科会において行うこととした。

なお、今年度の研究は、研究員の所属学年等の現状を考慮し、地理的分野と歴史的分野の2分科会で構成し授業研究を中心に行った。

Ⅲ 地理的分野の研究内容

1 地理的分野研究副主題及び副主題設定の理由

地理的分野研究副主題

地域的特色を明らかにする学習を通して、自ら課題を設定・追究する力を育てる指導と評価の工夫

近年、社会科地理的分野での地域調査活動を取り入れた授業の必要性が高まっている。それは、今回の学習指導要領の改訂で、地理的分野の「目標(4)」に示されているように、地域調査のような主体的な学習によって、地理的事象に対する関心などを育てたり、地域的特色をとらえるための視点や方法を身に付けさせたりすることが地理的分野共通の課題であるからと考える。昨年度の研究員の研究もその課題を追究したものといえる。

現在、地理的分野における指導の実態や生徒の実態を考慮したとき、生徒自身が資料の収集・選択・活用する能力を身に付ける研究は、今後さらに重要性が増すものと思われる。従来の教師主導の講義形式の授業では、主体的に資料を収集・選択・活用する能力を身に付けることは難しい。こうした能力を身に付けるためには、景観の観察といった視覚的にとらえる活動や、作業や体験を伴う学習、課題を設定し追究する学習などを工夫するなど生徒の主体的な学習を促すことが必要である。

そこで、今年度も昨年度の実践研究を継続・発展させていくこととした。具体的には、「より大きな規模の地域の学習にどうつなげていくか」という昨年度の課題を引き継ぎ、「都道府県」単位での授業を取り上げ、学び方を学ぶ学習についてさらに研究を深めることとした。

今年度は、特に生徒が自ら課題を設定していくという課題解決型の学習の研究が必要であるとの思いを強くした。なぜなら、自ら課題を設定し追究・解決していく学習は、前回の学習指導要領においても、「適切な課題を設けて行う学習」をはじめ、年間指導計画作成の際に計画的に実施していくことが示されているにもかかわらず、実際には、知識を詰め込む学習に陥ったり、人間の生活との関連付けが不十分だったりすることが多く見られ、研究の余地が多いからである。とりわけ、課題を設定しその後の学習に見通しをもって課題追究や課題解決を生徒自らが行っていく指導方法の工夫を模索した。そこで、課題をただ決めるのではなく、例えば「長野県は内陸的な気候なのでレタスを生産する農家が多いだろう」という仮説を生徒自身が立て、資料の収集・選択・活用をしながらその仮説を検証するというような過程をとれば、生徒が課題に対して最後まで主体的、意欲的に取り組むのではないかと考えた。

また、意欲を持続させるために、ポートフォリオを活用した評価方法を取り入れた。ポートフォリオを活用した評価は、課題の設定・追究の様子を生徒の学習記録や自己評価を通して、教師が生徒自身の内面を知り適切な助言等を行っていくものである。これは、生徒の学習意欲を高め持続させるために有効な手だてであり、課題の設定や追究する過程における教師の支援と授業案の修正のための資料としても大きな手がかりとなると考えた。さらに、ポートフォリオを活用した評価は、生徒の個人内評価としての要素が強いが、生徒の学習の記録や作品を保存するという性質から、評価規準を定めてあれば、観点別評価においても役立てることができ

ると考えた。

2 検証授業

(1) 単元名 「都道府県」《学習指導要領 内容(2) 地域の規模に応じた調査》

(2) 単元設定の理由

地理的分野分科会においては、今年度の研究単元として、大項目「地域の規模に応じた調査」の中の中項目「都道府県」を取り上げることにした。

平成14年度から施行となった学習指導要領の社会科地理的分野における改訂の大きな特色の一つには、これまでの網羅的な学習になりがちな内容を厳選し、「学び方を学ぶ学習」の充実に大きな力を注いでいることがあげられる。その中でも「地域の規模に応じた調査」は、自らの力で変化する地域の特色をとらえ、「学び方を学ぶ学習」の実践の項目として位置付けられている。また、「地域の規模に応じた調査」は、中項目として「身近な地域」「都道府県」「世界の国々」の三つの規模の異なる地域の学習を通して地域的特色をとらえる視点や方法を身に付けることを主なねらいとしている。「身近な地域」が実際に目に触れたり、歩いて聞き取りをしたりする調査が可能であるのに対して、「都道府県」は、基本的には、実際に見たり、歩いたりすることには限界がある。よって、「都道府県」の地域的特色を明らかにするためには、生徒が自らの力で適切な資料の収集・選択・活用する能力を身に付けることが重要となり、さらに広い地域を扱う次の中項目「世界の国々」の学習の下地となっている。

したがって、本年度の地理的分野分科会の研究副主題にある「地域的特色を明らかにする学習を通して、自ら課題を設定・追究する力を育てる」ための最も適した単元として、「地域の規模に応じた調査」の「都道府県」を研究単元として設定した。なお、昨年度の研究においても「身近な地域」との関連で「都道府県」が取り上げられているが、本分科会では、生徒の「主体的な学習」をより促すための「都道府県」の学習内容の構成の工夫、また、自ら課題を設定・追究する能力の育成の工夫に重点を置いて今回の研究を進めることにした。

(3) 「都道府県」の学習をどのように構成するか

「都道府県」の学習について、「学習指導要領 解説－社会編－」では、「都道府県の中から、二つ又は三つの都道府県を取り上げ、その地域的特色を追究しとらえる学習を通して、都道府県規模の地域の特色をとらえる視点や方法を身に付けさせることを主なねらいとしている」と解説している。したがって、取り上げる都道府県は、二つ又は三つのどちらでもよいわけであるが、今回は、多面的・多角的な視点・方法で学習できるよう、学校所在地である「東京都」を含め、三つの都道府県の学習を設定した。

(4) 事例とする都道府県をどのように選択するか

事例として取り上げる都道府県については、次の観点から選択した。

- ① 自然、人口、産業、地域間の結び付き、生活や文化などの視点からみて、生徒にとってわかりやすい明確な特色がみられ、三つの事例を通して最終的にこれらの視点をほぼすべてカバーできるような都道府県を選択すること。
- ② 三つの事例を通して、異なる視点や追究の学習を体験できること。
- ③ 異なる特色をもつ都道府県の学習の相互比較により、各都道府県的特色をより鮮明にと

らえることができるような都道府県を選択すること。

また、第二、第三の事例とする都道府県を選択について、第二の事例は、生徒が調べやすく東京にはない明確な地域的特色を多くもっていること、第三の事例は、東京とは対極にあるきわだった特色をもち、第一、第二の事例とは、異なる学習方法を取り入れやすいことをポイントとした。

なお、今回、本分科会は、事例とする都道府県を選択の一つの試みとして、下の表のような項目・視点にしたがって選択すべき都道府県について、7地域から候補を上げ考察してみた。

その結果、最終的に「東京都」「長野県」「鳥取県」を事例とする都道府県として選択し、授業を組み立てることにした。

項 目	視 点	北海道	東北			関東	中部		近畿	中国・四国					九州			
		北 海 道	山 形	青 森	福 島	東 京	長 野	新 潟	和 歌 山	京 都	島 根	鳥 取	広 島	岡 山	愛 媛	福 岡	熊 本	沖 縄
自然環境に 関すること	位 置	◎		○			○	○	◎	○	○				○	○		◎
	地 形	○	◎	○	◎		◎	○		◎		◎	◎	◎			◎	
	気 候	◎	◎	○			○	◎	◎	○	○	○			○			◎
人口に 関すること	分 布	○	○		○	◎						○	○	○				○
	構 成			○	○				◎		◎	○						○
産業に 関すること	農 業	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎		○	◎			○	○	◎	○
	工 業	○	○				○		○			◎	○	○	○	◎	○	
地域間の結びつ きに関すること	交通網	○	◎	○	○	◎	○						○	◎	◎			
	国際化	○				◎										◎		○
生活・文化 に関すること	語・文化	○	◎	○	○	○	○	○		◎	○		○			○	○	◎
	歴 史	◎				○				◎	○		◎			◎		◎

○・・・特色がみられる、◎・・・いちじるしい特色がみられる

(5) 事例とする都道府県を選択理由

〔東京都〕 学校所在地。特に人口の集中という視点を中心に、首都としての機能、交通、国際化などの視点から取り上げる。

〔長野県〕 日本アルプスに囲まれ、盆地や扇状地など変化に富む自然に恵まれた内陸県で果樹栽培や精密機械工業、ダムの建設など、東京に見られない多岐にわたる明確な特色をもつ県であり、生徒が主体的に取り組むやすい県として選択した。また、東京都では、長野県に移動教室の施設をもつ所も多く、生徒にとって親しみやすい県の一つと考えられる。

〔鳥取県〕 東京都の人口過密という視点からほぼ対極にあり、東京都・長野県のいずれとも異なる学習方法を試みる県として、過疎化に悩み、鳥取砂丘という特殊な自然条件をもつことから第三の事例として選択した。

(6) 事例とする都道府県を扱う学習の視点と方法

① 内容構成の工夫

本中項目の「都道府県」の調査活動を「導入」「展開」「まとめ」と段階的に位置付け、調査活動の技術を習得できるよう構成した。

② 指導の工夫

中項目全体を通して主体的に学習に取り組ませるために、課題追究的な学習を取り入れた。また追究結果の発表学習を取り入れた。

③ 評価の工夫

中項目全体を通して学習活動の経過をポートフォリオに保存し、自分自身の学習活動を自己評価することとした。

〔東京都〕：生徒の既習事項をもとに、統計資料を扱う調査方法を学ぶ

「学校所在地の都道府県」である東京都については、小学校での既習事項を土台とすることができ、他、「身近な地域」を含む地域であるために生徒の生活実感を伴った学習を行いやすい。そこで、生徒の学習意欲を高めるために生徒自身に東京都の地域的特色を推測させる学習活動を導入とし、その上で、推測を裏付ける客観的な統計資料の取り扱い方についての学習を行う。また、「学び方を学ぶ学習」として、ここでは前述した視点を基に「都道府県を単位として作成された統計資料の収集・選択・活用」の方法を学ぶことに主眼を置くこととした。

〔長野県〕：様々な視点から地域的特色を明らかにする方法を学ぶ

前述のように、長野県は、中学生にも比較的容易に見いだせる地理的な視点多く、「その地域的特色を追究しとらえる学習を通して、都道府県規模の地域的特色をとらえる視点や方法を身に付けさせる」という都道府県を扱う学習の目標からみて、事例とする地域として適した県の一つである。ここでは「課題を設定・追究・解決する」という課題解決学習を取り入れた。具体的には、東京都（第一の事例地域）を事例とした統計資料の学習をもとに、地域的特色をとらえるための課題を仮説として資料から見いだし、その課題（仮説）を説明し裏付けるために資料を収集・活用して解決（検証）させる活動を行い、その結果を地域的特色と関連付けてまとめさせた。この小項目が「自ら課題を設定し、追究して地域的特色を明らかにする」という都道府県規模の学習の方法を学ぶ中核となる。なお、ここでの学習の工夫については以下の通りである。

① 内容構成の工夫

県的特色を生徒自ら見いだし課題（仮説）を設定しその課題を検証、まとめる学習活動を通して主体的に学習が行われるよう構成した。

② 指導の工夫

生活班を活用して班学習を組織し、課題検証を行った。課題を検証していく、いわば本研究の中心に班学習を位置付けることによって、共同して資料を収集・活用する場面やお互いの情報を交換する場面を作り出すことのできる指導を工夫した。また、追究結果の発表については、個人で結果をまとめたのちに画用紙上で再構成させることで個人学習とグループ学習の連携を図った。

③ 評価の工夫

ポートフォリオを活用した評価方法で、生徒が自分の学習活動を自己評価することは前

述したとおりだが、特にこの項目では、「形成的評価」と「総括的评价」を重視することが生徒の学習活動の適切な支援となると考えた。また(8)に示す学習指導計画で、学習目標の達成は、授業中における指導と評価(形成的評価)を適切に行うことによって実現されるものであるため、「第1段階」「第2段階」時の評価は形成的な評価と位置付けた。「第3段階」では本小項目の最終段階となるため、総括的な評価を行う。

〔鳥取県〕：地域的特色をさらに追究し明らかにする方法を学ぶ

鳥取県は、過疎化という課題と日本随一の面積をもつ鳥取砂丘が見られる県である。過疎化については、人口分布図や人口ピラミッドを参考に人口はなぜ減ってしまったのか、それについてどのような対策が講じられているのかを考察し、鳥取砂丘については土地利用図を参考に、農業には適さない土壌をどのように克服しているのか、また砂漠化防止の技術は他地域にどのように影響を及ぼしているのかなど、地域的特色を「動態的地誌」の方法で追究していく方法を学んでいく(※)。

※「動態的地誌」の方法とは、各地域の特色ある地理的事象(上で言う「過疎化」と「鳥取砂丘」)に着目し、それを中心にして関連する他の地理的な事象を有機的に関連付けながら取り上げ、最終的にはある程度総合的に地域的特色が明らかになるよう構成していこうとするもので、各地域の特色をとらえることのできる方法である。

(7) 単元の目標

- ① 地理的な事象から課題を見だし、追究する過程を通して主体的に学習に取り組んでいく態度を育てる。
- ② 地図・統計資料などを収集・考察し課題を追究する学習を通して、都道府県規模の地域的特色をとらえる視点や方法の基礎を身に付ける。
- ③ 追究した結果を地図や統計資料を活用してまとめる学習を通して「地理的なまとめ方や発表の方法」の基礎を身に付ける。

(8) 学習指導計画

- ① 「東京都」：生徒の既習事項を基に、統計資料を扱う調査方法を学ぶ：7時間
- ② 「長野県」：さまざまな視点から地域的特色を明らかにする方法を学ぶ：7時間
 - 第1段階：長野県の地域的特色を見だし、課題を設定しよう(第1・2時)＜本時＞
 - 第2段階：設定課題を追究しよう(第3・4時)
 - 第3段階：追究結果をまとめて発表し、長野県の地域的特色をとらえよう(第5・6・7時)
- ③ 「鳥取県」：地域的特色をさらに追究し明らかにする方法を学ぶ：5時間

	学習目標	学習活動	指導上の留意点	評価規準
東京・	・「身近な地域」の学習を振り返り、地域的特色を見いだす(東京都内の一地域的特色となる)。	・地域的特色の裏付けとなる資料の活用法を学ぶ。 ・「都道府県を単位として	・資料の活用方法や地図化、統計資料のグラフ化については	・「身近な地域」の学習を基に地域的特色を見出すことができ

導入 7 時 間	・既習事項を基に東京都の地域的特色を追究する。 ・追究結果を発表し、友人に伝える。	作成された統計資料の収集・選択・活用」の方法を学ぶ。	・教師が支援を行う。 ・本単元の導入として生徒の意欲を高めることに重点を置く。	・たか(思考判断)。 ・結果を地理的な方法でまとめることができたか(資料活用)。
長野県・展開7時間 8 本 時 間 V	第1段階・ ・資料を活用し長野県の特徴を見いだす。 ・長野県の地理的事象がそれぞれ関連し特色として成り立っていることに気付く。 ・学習事項を整理し自ら課題を設定する。	・図書室を利用し、文献資料から特徴を見つける(個人学習)。 ・各自で見いだした特色について、その理由を仮説を立てながら班で話し合う。	・教科書・地図帳・文献資料を準備しておく。 ・自分で見いだせない生徒については教師が適宜支援する。 ・発表形態(追究は個人学習。発表は班でまとめる)について知らせ、見通しをもたせる。	・長野県の特徴を積極的に見つけ出していたか(関心・意欲・態度)。 ・長野県の特徴を資料から見いだすことができたか(資料活用)。
第2段階 2 時 間	・目当てとした資料を収集し、課題を追究する ・追究結果の発表方法を考えてまとめるを行う。	・収集した資料の中から追究課題の内容を説明し、裏付けているものを選択し活用する。 ・発表用紙(B5版の画用紙)を配布し、レイアウトに留意しながら資料を作成する。	・追究課題と選択資料との整合性を常に確認させる。 ・地図や統計資料を適切に使用して発表資料を作成するよう指示する。	・適切な資料を選択し活用することができたか(資料活用) ・長野県の特徴と関連させながら課題追究を行うことができたか(思考判断)。
第3段階 3 時 間	・調査結果を発表し、学習成果を共有する。 ・追究結果を基に長野県の特徴についてまとめる。	・学習成果を班ごとに発表し「調査内容」「発表方法」のよいところに着目する。 ・長野県のキャッチフレーズを考え、地域的な特	・大きな声で分かりやすく発表させる。 ・聞き手にメモをとらせる。 ・読んで楽しいキ	・追究成果を十分に発表することができたか(資料活用)。 ・長野県の特徴を踏まえて

時間		色を明らかにする。	ヤッチフレーズを作成させて学習をまとめさせる。	キャッチフレーズを作成することができたか。(関心・意欲、思考判断)
鳥取県・深化5時間	・地図や統計資料に親しみ、地域的特色を自ら理解する方法を身に付ける。 ・身に付けた方法により課題を解決する。	・人口分布図や人口ピラミッド、土地利用図などの資料から地域的特色を見いだす。 ・特色を追究する視点についても設定する。	・自分で見いだせない生徒については教師が適宜支援する ・都道府県規模の調査学習のまとめとして各自の活動に適宜支援する。	・鳥取県の地域的特色を自分なりに見いだすことができたか。(関心・意欲、思考判断) ・都道府県規模の追究結果をまとめる方法に習熟できたか。(資料活用)

【単元の評価規準（総括的評価）※「長野県」のみ】

- ① 長野県の特徴を積極的に見いだすことができたか。＜関心・意欲・態度＞
- ② 長野県の特徴を資料から見いだすことができたか。＜資料活用＞
- ③ 適切な資料を選択し活用することができたか。＜資料活用＞
- ④ 長野県の地域的特色と関連させながら課題追究を行うことができたか。＜思考判断＞
- ⑤ 追究成果を十分に発表することができたか。＜資料活用＞
- ⑥ 長野県の地域的特色を踏まえてキャッチフレーズを作成できたか。＜思考判断＞

(9) 意欲を高め持続させるためのポートフォリオを活用した評価について

本研究においてポートフォリオを活用した評価を用いた理由については前述したとおりだが、この評価を用いることについては、この評価の特性（学習が進めば進むほどファイルが厚くなり生徒の自己評価も深化していく）を生かせるよう次のような指導をした。

- ① 追究過程で手に入れた資料は必ずポートフォリオに保存する。
- ② 集めた資料の出典・年次を明記する。
- ③ 毎時間の終了時に学習を振り返り自己評価する。
- ④ 毎時間の最初に前時の自己評価を確認して授業に臨む。

このような指導を積み重ねることによって生徒の意欲を高め持続させるよう工夫した。

(10) 本時（第1段階）の目標

- ① 資料を活用し長野県の特徴を見いだす。
- ② 長野県の地理的事象がそれぞれ関連し、特色として成り立っていることに気付く。
- ③ 学習事項を整理し自ら課題を設定する。

<第1段階 第1時(図書室)>

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入 ・ 10分	- 生徒と長野県の関連 - 今後の学習の説明	- 移動教室スキー実習ビデオを見る。(全体) - 内容のメモをとる。(全体)	小学生時代の移動教室の事を想起させる。	ビデオに関心をもち学習への意欲をもてたか。(関心・意欲/観察)
展開 ・ 30分	長野県の特徴を見いだす。	- 資料を収集しワークシートにメモする。(個人) - 個人で集めたものを班でまとめて画用紙に書く。(班)	- 長野県の地図や統計資料を活用する - それぞれの特色の関連に気付かせる。	積極的に資料を探し特色をとらえたか。(資料活用/ワークシート)
まとめ 10分	- 特色を相互に関連付ける。 - 次時の予告	特色を自然・交通・農林業・工業・観光・その他に分類し、相互に影響しているものを結ぶ。(班)	一つの条件(例「雪が多い」)が複数の事象(例「スキーができる」「農業用水となる」)にかかわることを補足説明する。	見いだした特色相互の関連に気付いたか。(資料活用、思考判断/ワークシート)

<第1段階 第2時>

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入 ・ 5分	- 本時の説明 - 前時の補足	「長野県は〇〇だから△△なのだろう。」と仮説作りの説明を聞く。(全体)	前時の特色相互の関連を例にしながら説明する。	仮説作りの手順を意欲的に聞いているか。(関心意欲/観察)
展開 ・ 40分	仮説を作る。	特色の項目(自然、交通、農林業、工業、観光・その他)を使って仮説を作る。	自由に発表し合いなるべく多くの仮説を立てられるように促す。	特色から仮説を考えることができたか。(資料活用・思考判断)

分		(班) ・活動の中で気付いたことをメモする。 (個人)	・班ごとの学習進度に配慮して作業させる。	／ワークシート
まとめ 5分	・仮説を検証するための話し合い	・収集した資料を整理し次時への見通しをもつ。(班)	・検証のための資料がそろっているか確認させる。	・仮説を検証する資料の整理ができたか。(資料活用／ワークシート)

(11) 授業の考察

本単元では、長野県についての地域的特色がどのような要因で成り立っておりそれがどのような影響を及ぼすのかという課題追究の方法として、仮説を設定しそれを検証する学習活動を取り入れてみた。そのことによって、生徒が主体的に課題を考え意欲的に資料を収集し課題を解決しようと検証活動を展開するであろうと考えた。本時以降の授業も含めた授業に関する考察は以下の通りである。

① 適切な資料を収集・選択・活用できたか

生徒は、小学校で調べ学習の経験があるとはいえ、中学校1年生ということを考えると、予想をはるかに上回り、とても的確で迅速な資料の収集・選択を行った。その理由としては、第一の事例地域である東京都での学習で統計資料等の取り扱いを学んでいたことがあげられる。また、資料の中から適切な情報を選択し項目や視点別に分類するという作業においても、東京都の授業ですでに経験しているため戸惑うことなく分類することができた。以上から、生徒の既習事項をもとに、統計資料を扱う調査方法を学ぶといった東京都での学習が生かされることがわかり、単元構成を工夫した成果があらわれた。

② 適切な仮説を設定することができたか

仮説の設定という初めての体験に戸惑う様子が予測されたため、生徒には「長野県は〇〇だから△△なのだろう」という仮説設定のパターンを事前に示した。項目（自然・交通・農林業・工業・観光・その他）別に仮説を設定したが、例えば最初は「雪が降るから、山が多いから、スキーができるんだろう」といった発展性の乏しい仮説が多かった。そこで、「雪や山は他に交通や農林業、工業にどんな影響があるだろうか？」と教師が助言してみたところ、それまでの仮説が「四方を山に囲まれている長野県でレタスの生産が多いのは、気候だけでなく場所も関係しているはずだ」と変化した。以上のことから、教師が助言するという支援が仮説の設定、つまり課題を考える上でとても重要であることがわかった。下の事例は生徒の立てた仮説の一部である。

「野菜や果物作りがさかんになったのは、自動車輸送も発達してきたからであろう
「長野県に観光客がたくさん来たから、自然破壊の問題が増加し始めたのだろう」

「精密機械や電気機械が発達したのは工業をするのに適した所だからであろう」

③ 仮説検証型の授業は生徒の学習活動を促し主体的に学ぶ力を身に付ける学習方法として適切であったか

グループで情報を持ち寄り仮説を検討し合うという生徒主体の学習活動を行うことで、教師主導型の一斉授業とは異なった反応が見られた。仮説を設定するためには、班員からの情報を収集しなければならず、おのずとリーダーを中心に全員が参加する形式がとられた。仮説とはいえ、根拠のある情報を見つけなければ検証することにならない。そこに自ら学ぼうとする意欲が生まれ、活発に学習活動を行うという結果となったのである。この動きは、検証＝証明するという今後の授業でさらに高まるはずである。また、前述したように、仮説を設定するために適切な支援を行うことにより、学習が深まり、「本当かな?」「なぜだろう?」といった疑問がわき、生徒の目が生き生きとしだして、最後には「次の時間ももっとやりたい」という発言もみられた。このことから、仮説検証型の課題解決学習は、学習することに対する意欲を高めかつ持続させる有効な学習方法だったと考える。

3 地理的分野の研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

① 仮説検証型の学習は学習意欲を継続・定着させる

本分科会では、選択した3つの都道府県をそれぞれ「導入」「展開」「まとめ」と位置付け、常に主体的に学習させることを意識した。具体的には、自ら課題を設定し追究し解決していくという課題解決（仮説検証）学習を取り入れた。生徒同士の話し合いはもちろん、教師との話し合い（支援）やポートフォリオを活用した評価による活動に時間をかけて課題設定を行った結果、「次の時間ももっとやりたい」「でもこれって本当かな?」といった発言がみられた。このことから、仮説検証型の学習を取り入れたことで、課題設定時における意欲が高まっただけでなく、持続するのにも成果があったと考える。

② 教師の様々な支援の工夫が生徒に自ら学ぶ力を身に付けさせる

課題を設定するには、まず適切な資料を収集・選択する力が必要となる。本研究では、「学び方を学ぶ」基礎ともいえるこの力を東京都の学習において学習し、長野県において課題を設定（仮説）・追究（検証）する活動を行った。課題を設定するに当たっては、簡単に設定させることを避け、発展性のある課題となるまで何度も教師による助言を行った。課題の追究過程においても同様にじっくりと考えさせる時間を与えた。この結果、資料を基にもっと調べようとする姿勢や、グループで知恵を出し合おうとする話し合い活動が活発に行われ、積極的に学習することができるようになった。

③ ポートフォリオを活用した形成的評価の工夫は生徒の学習意欲を高める

近年、評価方法の工夫改善が求められている。本研究でも単元を通してポートフォリオを活用した評価の工夫を行った。この評価は、教師が生徒の学習活動を評価するだけでなく、生徒が自分の学習活動を記録・保存したものを通し自己評価するといった特色をもつ。今回の課題解決（仮説検証）学習では、前述したような成果がみられたが、ポートフォリ

オを活用した評価方法を取り入れることでその成果がさらに顕著になった。

例えば、自分のポートフォリオを常に振り返る環境を与えることにより、教師の記入したアドバイス等が課題解決の糸口となった。時には、学習物等を振り返って原点に戻ってみたり、過去の学習物等の中から意外な情報を得たり、追究結果をまとめるキャッチフレーズ作成の際のキーワードを見つけたりすることができた。以上のことから、生徒自身が自分の学習にポートフォリオを活用し自己評価することは、生徒の学習意欲を高め、主体的な学習をより一層充実させるために大変有効であった。

(2) 今後の課題

意欲を高め自ら学ぶ力を育てる上でポートフォリオを活用した評価が有効であることは前項で述べた通りだが、課題解決（仮説検証）学習の場合、調べ学習や話し合い活動に時間が取られてしまい、評価の扱いがおろそかになってしまいがちであった。教師による支援とポートフォリオを活用した自己評価のバランスをいかにうまくとっていくかが今後の課題である。

また、今回取り扱った単元では、「学び方を学ぶ」ための学習として課題解決（仮説検証）学習を取り入れたが、各項目のねらいにあった学習方法としては限界があると感じた。今後、各項目のねらいにあった学習方法のさらなる工夫と開発が不可欠であると思われる。

Ⅳ 歴史的分野の研究内容

1 歴史的分野研究副主題及び副主題設定の理由

歴史的分野研究副主題

体験的な学習や課題解決学習を通して、学習意欲を高め、主体的に学習する態度を養う

自ら学ぶ力は、生徒が主体的に学習する中でこそ育成できる。生徒が主体的に学習するかどうかは、学習意欲を育てることが大きなキーポイントになる。歴史の学習が、従来ながらの知識詰め込み・暗記型の学習、教科書の記述中心の網羅的な内容、教師主導の講義形式の授業だけでは、学習意欲が高まることもなく、主体的な学習は期待できない。従来の授業から脱却し、指導内容（単元・教材）、指導方法（授業形態）を工夫することによって、学習意欲を高め、主体的に学習する態度を形成することが重要である。

生徒が主体的に学習するのは、具体的な事象・事物や身近に感じる内容を学習したときや、課題解決学習を行ったとき、何らかの体験をしたとき、あるいは専門家などの話に触れる学習をしたときなどである。本分科会では、これらのことを歴史的分野の学習で具体化することにより、生徒の学習意欲を高め、主体的に学習する態度を育成することができると考えた。

具体化のために、現代にまで続く伝統文化について、身近にいる専門家から生徒が気軽に教えてもらいながら体験する学習を工夫してみた。当時の文化が現在まで続いていること、身近に専門家がいて気軽に教えてもらえること、50分から1時間程度の授業時間内で生徒が比較的簡単に体験が可能な内容であることがこうした体験的な学習の条件となる。また、生徒が自分のものとしてとらえた課題を自ら調べて解決し、その経過・結果等を工夫してまとめ発表するといった課題解決学習を取り入れ、まとめの方法や発表の方法を工夫して表現力（プレゼンテーション能力）のより一層の向上を図ることとした。

以上のような指導内容、指導方法で生徒の学習意欲や主体的に学習する態度を育成していくためには、教師が適宜評価を行い生徒及び教師自身へフィードバックして、授業に生かしていかなければならないと考え、評価方法の工夫も試みた。一つは、自己評価の工夫である。もう一つは、形成的評価の工夫である。平成12年12月に提言された教育課程審議会答申「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」の中で、評価方法の改善として自己評価や生徒同士による相互評価の有効性や、学習の過程における生徒の作品などを保存し学習の進め方などの指導に役立てる評価の有効性が指摘されている。そこで、生徒の自己の学習状況を評価する力を高めるとともに、教師が指導に生かす評価の工夫として、最近、総合的な学習の時間などで行われているポートフォリオを活用した評価方法も検討し取り入れた。

以上のような指導内容、指導方法、評価の工夫が、有効に作用し、生徒の学習意欲を高め、主体的に学習する態度を形成すると考え、歴史的分野の副主題を設定した。

2 検証授業

(1) 単元名 「東アジア世界と中世社会の変動」《学習指導要領 内容(3) 中世の日本》

(2) 単元設定の理由

学習指導要領の中の歴史的分野「2 内容」の「(3) 中世の日本」では、今回の改訂で新たに加わった「目標(1)」の中の「我が国の歴史の大きな流れ……を理解させ」が示すように、鎌倉から室町時代を一つの歴史の大きな流れとしてとらえた学習展開を図る必要がある。また、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」に、「……また、生徒の主体的な学習を促し、課題を解決する能力を一層培うため、各分野において、第2の内容の程度や範囲に十分配慮しつつ事項を再構成するなどの工夫をして、適切な課題を設けて行う学習の充実を図るようにすること」とある。このことから、この単元では内容を再構成し、「体験的な活動」と「ワークショップ」を取り入れた課題解決型の学習方法を取り入れることとした。

「体験的な活動」と「ワークショップ」を大きな柱として単元を再構成した場合、中世とくに室町時代の文化は、今日の生活様式の基礎として多くのことが伝わっており、生徒にとって体験しやすく分かりやすい活動を設定できる。「自ら考え自ら学ぶ」「学び方を学ぶ」といった学習指導要領のねらいに近づけるには、第1学年からの早い段階に今回の検証授業で行うような体験的な活動を取り入れた課題解決型の学習等を設定することが有効であると考えられる。また、ここでは形成的評価を重視し、ポートフォリオを活用した評価を取り入れた。そのことで、生徒に基礎・基本の定着を図り、学習意欲を喚起することができるものと考えた。

以上のような理由から、「中世の日本」の中の「東アジア世界と中世社会の変動」を検証授業の単元として設定した。単元の進め方としては「体験的な活動（伝統文化の継承者を講師として招いての体験）」と「ワークショップ（講師への質問や意見交換）」をきっかけとし、体験したことに関連する項目を調べ、班ごとの「新聞」にまとめ、屋台村ローテーション方式（※）で全員が発表をし互いに学ぶこととした。以上の「課題解決学習」を10時間で扱う構成とした。

※「屋台村ローテーション方式」とは、少人数の人間が各発表会場に足を運びすべての発表を聞く形態の発表方法をいう。

(3) 単元の目標

- ① 武士や民衆の活力を背景にして生み出された新しい文化（中世の文化）の特色について理解させる。
- ② 中世の文化とかかわりのある人物や事件等から、中世社会の変動をとらえさせるとともに、東アジア世界とのかかわりにも気付かせる。
- ③ この時代に生み出された文化が、今日の伝統文化の原型になっていることに気付かせる。
- ④ 体験的な活動やワークショップの経験と、自らの課題を設定し解決していく中で、主体的に学習する態度を育てる。

(4) 学習指導計画(10時間扱い)

時	学習内容	学 習 活 動	指導上の留意点	評価規準と方法(形成評価)
1	課題の設定の準備 ・中世の文化のあらましについて知る。	・各時代の文化の写真を並び替えるクイズを行う。 ・体験する文化の内容と講師の説明を聞く。	・(コース)茶道、華道、能楽、水墨画、祭囃子	〈関〉意欲的にクイズに参加しているか。(教師による観察) 〈関〉体験するコースを積

		・自分が体験するコースを選ぶ。 ・これからの学習の進め方についての説明を聞く。 ・ポートフォリオの説明を聞き必要事項を記入する。	・どのコースも7～8人になるよう調整する。	極的に選ぼうとしているか。(教師による観察、ポートフォリオ)
2	課題の追究 ・体験する文化に関する調べ学習 ・ワークショップの準備	・コースを確認する。 ・コースごとに分かれ体験する文化の調べ学習を行う。 ・ワークショップの先生に対する質問を考え、班でまとめる。 ・ポートフォリオに必要事項を記入する。	・調べ学習が短時間で終わるように、コースごとに調べやすい資料を準備する。 ・簡潔にまとめられるようにワークシートを作成する。	〈関〉積極的に調べ学習に取り組んでいるか。(教師による観察、ワークシート) 〈思〉自分の選んだ文化について現代との関連などをとらえながら適切な質問がなされているか。(ワークシート)
この間、質問内容をまとめ講師に質問項目を送り、打ち合わせを行う。				
3	課題の深化 ・講師とのワークショップ	・中世の文化体験を行う。その後、講師とワークショップ形式の意見交換会を行う。 ・講師が指導する内容 茶道、華道、水墨画、祭囃子、能楽 ・ポートフォリオに必要事項を記入する。	・事前にワークショップの進め方について指導しておく(進行役は生徒)。 ・自分たちの調べたものが現代の日本の社会生活とどう結び付いているかを中心に話を聞かせる。 ・体験の中で疑問に思ったことを積極的に聞く姿勢をもたせる。	〈関〉自ら選んだ体験に進んで取り組んでいるか。(教師による観察) 〈関〉予め考えてきた疑問点や体験の中で生じた疑問点を適切に質問し、答えをワークシートに記入しているか。(教師による観察、ワークシート) 〈関〉意欲的にポートフォリオの記入を行っているか。(教師による観察、ポートフォリオ表)
4	課題の設定	・体験した文化との関連から、自	・準備した室町	〈関〉課題決定の話し合い

	・ 自班が取り組む課題を決める	分たちの班が取り組んでみたい課題を決定する。 [課題設定] 政治の流れ1（元寇～室町幕府の成立）、政治の流れ2（南北朝～戦国時代）、貿易と東アジアの動き、産業の発達、人々の生活など ・ 自分たちの班が取り組む課題が決定したら、個人の取り組む課題を決定する。	時代の構造図を参考に、各班で取り組む課題を選ばせる。 ・ 決まらなときは、どの体験グループがどの課題にふさわしいか話し合わせる。	に積極的に参加しているか。（教師による観察） 〈思〉自分たちの班が体験した文化と各課題を関連付けて考察できているか（教師による観察）。 〈関〉個人の課題を積極的に設定しているか。（教師による観察）
5 6 7	課題の追究 ・ 各自が取り組む課題を調べ、まとめる。	・ 各個人の取り組む課題を調べ、その内要をワークシートにまとめる。その際、体験した文化との関連についても考える。 ・ 新聞のレイアウトを決め、ワークシートの内容をレイアウト用紙に記入する。 ・ レイアウト用紙を張り合わせ、新聞を仕上げる。	・ 新聞の仕上げはペン書きで行わせる。 ・ 図やイラストなどを多く使い、視覚に訴える方法を考えさせる。 ・ 新聞の大きさはB3版とする。	〈資〉ワークシートへ自分の調べたことが的確にまとめられているか。（ワークシートの分析） 〈思〉体験した文化との関連について新聞の中できちんと触れられているか（教師による観察） 〈資〉新聞のレイアウトや内容が分かりやすく的確に作られているか。（教師による観察） 〈資〉様々な資料を適切に使い、新聞が作られているか。（教師による観察）
8	発表の準備 ・ 各班の課題に沿った新聞作りを行う。	・ 発表原稿を班で分担しワークシートに記入する。 ・ 互いに発表原稿を見せ合う。 ・ 発表のローテーションを決め、練習をする。	・ 発表原稿は一人200字程度とする。	〈知〉自分の発表内容を理解しているか。（教師による質問・観察） 〈資〉分かりやすい発表になるよう工夫しているか（発表原稿） 〈関〉班の話し合いに積極的に参加しているか。（教師による観察）

9	課題の発表 ・新聞作りをもとに追究した課題についての発表を行う。	・新聞をもとに屋台村ローテーション方式で発表を行う。 ・発表はワークシートに記入しながら聞く。 ・その場で思いついた疑問は発表者に質問していく。 ・発表が終わったら各班の隊形に戻り、自分が聞けなかった班の発表内容を確認する。 ・ワークシートを完成する。	・各発表は質疑応答を含めて6分間とする。 ・一度に5つの班が発表し、それを6回繰り返す。 ・取材側と発表側に分かれて、ローテーションしながら発表させる。	〈関〉発表を意欲的に聞いて、積極的に質問できているか。(教師による観察) 〈資〉わかりやすく正確に発表できているか。(教師による観察) 〈知〉質問に対して的確に回答ができているか。(教師による観察) 〈思〉発表を聞いて、的確な質問をすることができているか。(教師による観察)
10	課題の発展 ・発表会で自らが感じたことを発表する。	・ワークシートをもとに、今回の学習で学んだことや考えたことを発表する。 ・学習評価表を記入し、今回の学習で学んだことをまとめ、発表する。	・フリーのディスカッション形式	〈資〉自分の考えをきちんとまとめて発表できているか。(教師による観察、ワークシート) 〈思〉中世の文化からその時代の政治・外交の動きや民衆の生活について考えを広げることができているか。(教師による観察、ワークシート)

〈関〉…関心・意欲・態度 〈思〉…思考・判断 〈資〉…資料活用の技能・表現 〈知〉…知識・理解

【単元の評価規準（総括的評価）】

- ① 個人の体験や班学習、個人の調べ学習に意欲的に取り組めたか。〈関心・意欲・態度〉
- ② 中世の文化の特色をその時代背景の中で理解することができたか。〈知識・理解〉
- ③ 中世の文化を現代社会とのかかわりの中で理解することができたか。〈知識・理解〉
- ④ 中世の文化からその時代の政治・外交の動きや民衆の生活について考えを広げることができたか。〈思考・判断〉
- ⑤ 様々な資料を適切に用いて新聞を作ることができたか。〈資料活用の技能・表現〉
- ⑥ 学習した事項を分かりやすく発表できたか。〈資料活用の技能・表現〉
- ① ワークショップや発表会で適切な質問をしたり、適切に答えたりすることができたか。
〈思考・判断〉

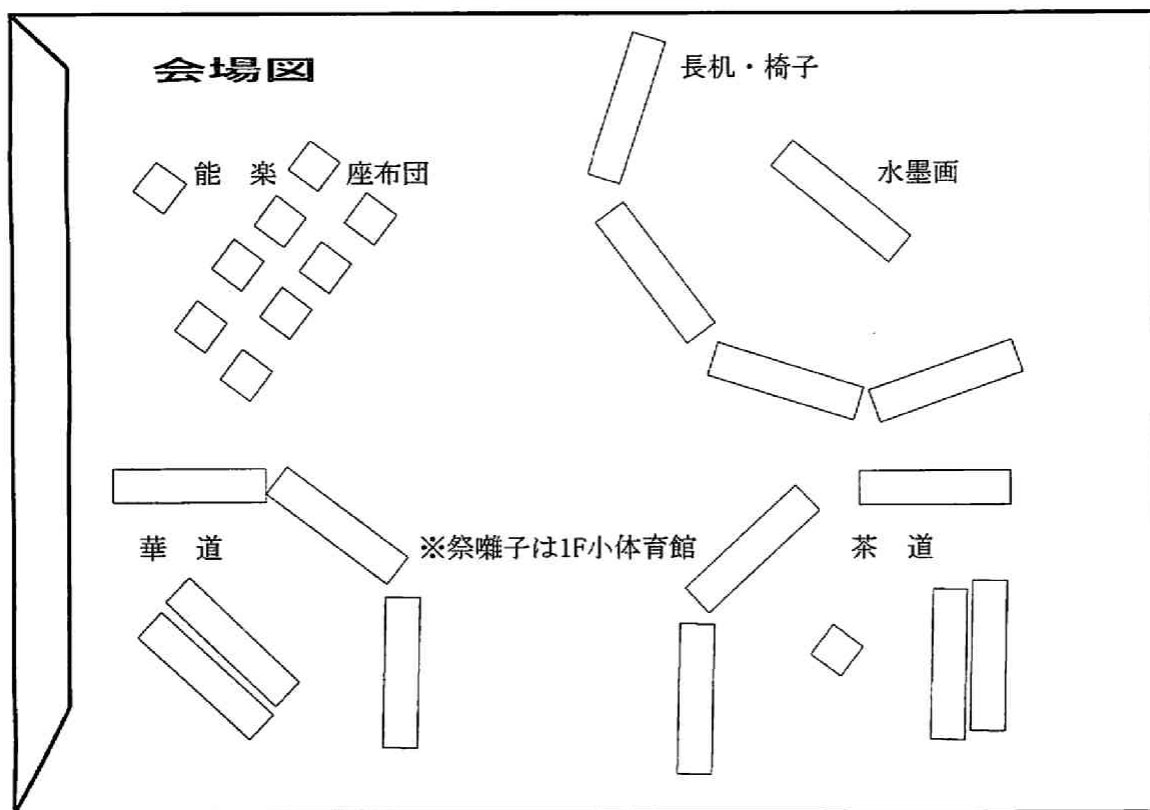
(5) 本時の目標

- ① 中世の文化を体験し、講師と意見交換をすることで中世の文化に対する関心を高める。
- ② 中世の文化の特色を現代社会との関連でとらえさせる。
- ③ 中世の文化がどのようにして生み出されたのかを考えさせる。

(6) 本時の展開

	学習内容	主な学習活動 と学習の形態	指導上の留意点	評価基準と方法 (形成的評価)
導入 3分	- 授業の進め方と要点 - 授業の講師の紹介	本時の授業の進め方と要点を理解する。(グループ)	- リーダー(進行役)との事前打ち合わせを行う。 - 講師への接し方について事前指導する。	<関>前向きに課題に取り組もうとしている。(教師による観察)
展開 I 35分	中世の文化の体験	- グループごとに自ら選んだ日本の伝統文化を体験する。(グループ) ※1グループ7人～8人	体験活動が円滑に行われているか観察し、生徒のつまづきを見つける。 (生徒が体験する文化) 茶道、華道、能楽、祭囃子、水墨画	<関>自らの課題に進んで取り組んでいる。(教師による観察・ポートフォリオの記入状況)
展開 II 7分	意見交換と疑問点の整理	事前に準備した質問表を参考にしながら意見交換を行う(グループ)	- 話し合いに参加できない生徒には、つまづいている点を聞き、参加できるように支援する。 - 意見交換が進まない班にはグループに教師が一時的に参加し助言する。	<関>疑問点などを整理し意見交換を行いワークシートの記入をすることができる。(ワークシートの記入状況・教師による観察) <関・思>ワークショップの中で生じてきた疑問点を適切に質問することができる。(話し合いへの参加態度・教師による観察)
まとめ 5分	- 講師へのお礼 - 学習内容の整理	- 代表者が講師へお礼を述べる。(グループ) - この時間に学んだことなどをポートフォリオにまとめる(個人)	- 事前にお礼の言葉を考えさせておく。 - 中世文化と現代社会とのつながりについて考えさせる。	<表現>適切な言葉でお礼ができる。(教師による観察) <関>意欲的にポートフォリオへの記入を行なっている。 (ポートフォリオの記入状況・教師による観察)

(授業の実際)



(ワークショップの記録から)

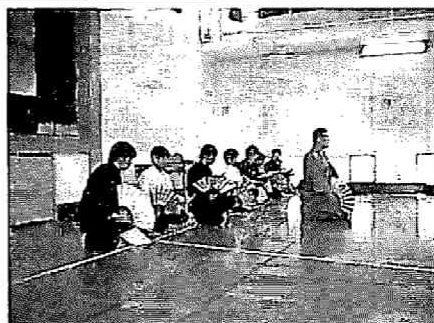
生徒の質問	講師の答え
華道コース ・生け花にさす花には決まりがあるのか。 ・どういうことを考えながら花を生けるのか。	・特にないが、とげのあるものやにおいのあるものは避ける。場所や目的によっていけるものが変わる。 ・これからいける花のよさをいかに生かすかを考える。 
花を生かしてあげることが楽しく、形になっていくのがうれしいと先生がおっしゃっていたけれど、体験をしてみてその気持ちがよく分かった。	
茶道コース ・礼儀作法はどのようなことで決められたのか ・茶道ではなぜこんなに礼儀が大切なのか。	・窮屈なものではなく相手を思いやる気持ちから決められたものである。 ・茶道は「和」に始まり、「和」に終わる。相手を尊敬する気持ちを表す。物事は「礼」に始まり「礼」で終わるものである。 

煎茶は5人一組で行う作法がある。一期一会という先生の言葉が印象的だった。先生に教えてもらったことを家に帰って家族に教えたが驚かれた。

能楽コース

- ・能楽をしていてためになったことは何か。
- ・能楽をやるときに大切にしていることは何か。

- ・古典に詳しくなれた。四季の移り変わりや空気の移り変わりが分かるようになった。
- ・離見と言って役をやっている自分を離れてみる。初心忘るべからず。



能を教えてもらえて楽しかった。今回の学習で日本の文化はほとんど正座をしてやるのが分かりがっくりきた。正座をしたので少し足が痛かったけれど逆にその痛みが思い出になって忘れないと思う。

祭囃子コース

- ・祭囃子はどんなときにするのか。
- ・どんなところが面白いのか。
- ・祭囃子を始めたきっかけは？

- ・夏や秋の祭りの時のほかに結婚式などのお祝いの時にやる。
- ・5人で競い合ったり、絡み合ったりするところ。
- ・小さいときから祭が好きだった。親もやっていたので抵抗がなかった。



小さい子供からお年寄りまで誰でもでき、保存会の中には90歳の方もいるとのこと。一曲の中で笛を聞かせるところや締太鼓を聞かせるところなどがあることが分かった。

水墨画コース

- ・「墨は五彩を兼ねる」と言われるが本当か。
- ・先生がよく描かれる絵は？

- ・墨と水の量によって色が変わっていく、5色以上に見える。だから本当だ。
- ・鳥や花など自然の絵を多く描くことが多い。



今回の学習で習字と水墨画のことが少しだけ好きになった。室町時代の学習では絵のことを調べてみたいと思う。

(7) 本時の評価

- ① 意欲的に体験活動を行い、意見交換を行なうことができたか。 <関心・意欲・態度>
- ② 中世の文化がどのようにして生み出されてきたのかを考えることができたか。
<社会的思考・判断>
- ③ ワークシートを使ってうまく意見交換を行い、記入することができたか。 <資料活用・表現>
- ④ 中世の文化の特色を現代社会との関連でとらえることができたか。 <知識・理解>

(8) 授業の考察

① 専門性を高めたワークショップの採用について

研究主題の「主体的な学習を通して」は、学ぶ主体の生徒にすべてを委ねるのではなく、単元の主題から学習しやすいテーマをいくつか設定し、その中から、生徒自身が学ぶテーマを選択して意欲的に取り組むことと考えた。そこで単元の導入の部分で「体験的な活動」を取り入れることにして、今回は歴史的分野の「東アジア世界と中世社会の変動」を室町時代の文化から学習させるように設定した。

研究主題にある「生徒の学習意欲を高め、自ら学ぶ力を育てる指導」を行うために、導入の場面で体験的な活動を取り入れてみたが、活動への細かな対応は、文化に関する専門的な知識に乏しい教員では限界があり、意欲を引き出すことも難しい。そこで公共機関から紹介を受け、地域にお住まいの方にゲストティーチャーを依頼し、実技体験の指導をお願いした。それぞれの活動を通して専門知識や技能を身に付け、ワークショップ形式で体験させることで、その後の学習に対する意欲を高めさせることができると考えた。

内容を盛り込んだ割に授業時間が短く成果が心配されたが、この時間のポートフォリオの中の記録には、生徒は「家の人にお茶を入れてあげたい」、「自分でお茶を入れてみたくなった」(煎茶)、「リズムをとって叩くのは大変」(祭囃子)、「能の歴史がよくわかった」(能楽)、「先生の説明がわかりやすかった」などと書かれていた。かなりの興味を示し事前に調べた事項等を熱心に指導者に質問しながら作品づくりや演技に取り組んでいたことで、当初予定していた生徒の学習意欲を高める目的は達せられたと考える。

② ポートフォリオを活用した評価について

研究主題がどの程度生徒の身についたかを確認する目的と自らが学習の効果を振り返ることができるように、ポートフォリオに保存するための評価用紙を作成して、時間毎に生徒に記入させた。内容は、「学習した内容」、「わかったこと」、「疑問」、「感想」、時間ごとの学習に関する「自己評価」を簡潔に記入するにとどめた。

生徒は、毎時間ポートフォリオ用の評価用紙に上記の事項を意欲的に記入し、その内容からも授業に取り組む積極的な姿勢を感じ取ることができた。また、内容を簡潔に記入することにとどめたことにより、それに対する教師のコメントも円滑に行うことができ、生徒の学習意欲を喚起することができたように思われる。このことから、ポートフォリオを活用した評価は、今後積極的に活用できると考える。

3 歴史的分野の研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

① 外部講師による中世文化の体験を通して、生徒の学習意欲を高める。

生徒が主体的に学習するかどうかは、学習意欲の定着と向上によるところが最も大きい。歴史の学習が従来のような知識詰め込み・暗記型、教科書中心の教師主導型の講義形式の授業だけでは、生徒の学習意欲を引き出すことは難しい。そこで、今まで公民的分野でも取り入れられていたワークショップ形式を歴史的分野でも取り入れた。現代にまで続く伝統文化を専門家と触れ合い体験すれば、必ず身近に感じ、学習意欲を高め、主体的な学習

へつなげられると考えた。そのため、体験学習を導入部分に位置付けた。また、ワークショップを少人数（7～8名程度）で編成することにより、体験に参加する機会が多くなり、さらに学習意欲を高めることができた。授業時数を増やせば、さらに外部講師との触れ合いが多くなり、質問も多く出され、より生徒の学習意欲を高めることができたであろう。

② 設定した課題を新聞形式にまとめ調査・成果を屋台村ローテーション方式で発表することにより、自ら学ぶ力を育てる。

グループに共通の学習課題をもたせ、自らのものとして学習課題をとらえさせ、自ら調べて問題を解決し、その経過や成果等を工夫してまとめ発表していけば、主体的に学習する姿勢を生みだし、自ら学ぶ力を育てることができる。新聞製作は、調べ学習の中で資料を活用し、互いに意見を出し合うことで、生徒の意欲を高め主体的な学習を促す点で有効である。

屋台村ローテーション方式は、一人一人が必ず発表者になるので主体的に学習する姿勢ができ、取材により自ら進んで学ぶ力や学習意欲を育てることで有効な方法であった。返答不可能の質問に「調べてあとで発表します。」という生徒がいたり、普段以上に熱心にメモをとる生徒が多くいたりするなど、学習意欲の向上が見られた。また、体験学習についての感想を質問する取材側の生徒が多く、他の文化への関心が広がったことも、自ら学ぶ力が育ってきたあらわれであろう。

③ ポートフォリオを活用した評価を用いることにより、生徒の学習意欲を持続させ、主体的に学習する態度を養う。

せっかく体験等により生徒の学習意欲を高めても、それが次へつながらなければ意味はない。ポートフォリオを活用した評価を効果的に取り入れ、生徒や教師からの評価を行い、フィードバックして授業に生かしていくことで、生徒の意欲や主体性を持続させることができる。教師が生徒のちょっとした反応、態度、つぶやきなども注意深く観察し、よかった点を記録してポートフォリオに保存し生徒にそれを示すことにより、学習意欲を持続させ、高めていくのに有効である。「生け花の歴史を調べて面白かった」「体験でいろいろ知ることができ楽しかった」「生け花を始めた人が初めて分かった。次はどんな時に飾るのかを調べたい」と意欲が持続され、さらに発展している例が多く見られた。教師にとっても、その日の活動が手に取るように分かり、次の指導に生かすことができた。

(2) 今後の課題

ワークショップの形態で体験的な活動を含んだ授業を、各单元ごとに展開することは難しい。単元の目標や内容に配慮しながら年間指導計画を立案したり、総合的な学習の時間との連携など学校全体での工夫が必要であると考え。また、体験を学習意欲に結び付け、さらに自分の学習課題に結び付ける指導が難しく、今後検討する必要がある。

また、生徒一人一人の学習活動を注意深く観察して、教師がポートフォリオへコメントすれば大変有効だが、一人の教師で行うには厳しいところがあった。今後はポートフォリオを活用した生徒の自己評価や教師の評価を有効に活用する方法について、指導内容、指導方法、評価の三つの点でさらに工夫していくことが課題である。